

サタンはソファから立ち上がると、そっと伊吹をベッドに押し倒した。

「俺の息吹はとても魅力的な女なんだ。他の男に取られそうになっているのが分かったら、疑惑段階でも警戒したくなる」
そう言うと、サタンは伊吹の唇にそっと自分の唇を触れさせた。

「さっきも言ったが、今日は朝になるまで離さないからな」

微かにほほ笑みながらそういうサタンに、伊吹はくすつと笑った。

伊吹はサタンの首の後ろに手を回し、その耳元で囁いた。

「分かっているよ」

伊吹の言葉にサタンは安心したように顔をほころばせると、再び伊吹の唇に自分の唇を重ねた。互いの息吹を交換するように、二人は何度もお互いの唇を貪り合った。

伊吹の口の中にはサタンから流れてきた温もりが漂っている。

温度を感じながら伊吹がしっかりと受け止めると、自分もサタンと同じように口の中の温もりを流し込んだ。

舌先が絡み合い、ぶつかり合い、互いの息が唇に感じられる。

互いの温もりを何度も交換し合うと、伊吹はサタンの唇から離れた。

「もう終わりか？」

少し不満そうにそう聞くサタンに伊吹はくすつと笑いながら答えた。

「まだ朝まで時間があるから・・・もう少しこうしていようよ」

「・・・そうだな」

二人は再び唇を重ねると、お互いの温もりを感じ合った。

二人の唇が離れると、互いに微笑み合い、そしてまた唇を重ね、舌を絡め合わせる。

そんなことをしている間に、サタンの手は伊吹のブラウスの襟元にかかけられ、ボタンをひとつひとつ外していく。ボタンをすべて外すと、サタンは伊吹の耳元に口を近づけた。

「ブラも外していいか？」